ポチェハ防衛戦で
亡くなった特別鮮
起部隊イェジキの
兵士たちの慰霊碑

スタラ・ヴェシの小学校が校名として「ポーランド・シベリア孤児」を冠した理由

・子どもの権利保障を考えた時、シベリアにてポーランドの孤児たちが救われた歴史を伝えていくことは非常に重要であるため。
・1924年に国連にて採択された「児童の権利に関する条約」には、子どもは適切な医療、教育が受けられ、意見が尊重され、人種や性別、意見の違い、障害、経済状況などによって差別されず、命は守られることが規定されているため。

校歌

作詞作曲：イェジ・コビリニスキ

生きていく
命ある　私
不安なく自由感じ
人を愛し愛されて
傷つけられず苦します
笑おうよ
感じよう絆
強くあろう
私でいよう
友と手を取り合って
悪い道は歩まない
子ども　権利　守りぬく
子ども　権利　誰にでも
夢見よう
私でいよう
弱いことは　罪じゃない
大声で歌おうよ
悲しければ　泣けばいい
子ども　権利　守りぬく
子ども　権利　誰にでも
子ども　権利　守りぬく
子ども　権利　守りぬく

校章

校章は1メートル四方の大きさで、旗地は布です。明るい木製の旗棒の先には金の玉、そしてその上には金の王冠を被った銀の鷲が鎮座しています。校章の左枠は金の固定線、上、下、そして右枠は金色のフリンジがほどこされています。

校章の表面はきなり色で、中央には黒い手が描かれていますが、これはシベリアの闇を表しています。その中にはポーランド国旗と同じ紅白で、子供の手があります。この手はシベリアという闇の中に閉じ込められていた子どもたちを象徴しています。

その周りを日本の桜が温かく包み込みます。シベリアで悲惨な状況にあった子どもたちに対し、日本が救いの手を差し伸べた様子です。その外側には金で「スタラ・ヴェシ学園（小学校・保育園）」とポーランド語で書かれています。校章の右上、そして左上には桜の枝がかかっており、右下にある日本国旗と左下のポーランド国旗は両国の友好関係を表しています。国旗と国旗の間にはポーランド語で「ポーランド・シベリア孤児記念小学校」と書かれています。

校章の裏は赤がメインです。中央には金色のくちばしと顎を持つ白い鷲がおり、右を向いている頭の上には金色の王冠があります。鷲の上には「神」「栄誉」、下には「祖国の学び」、そしてポーランドの独立100周年を記念し、1918年-2018年の文字があります。鷲の両側、翼の高さには金の装飾が施されています。

この校章は子どもたちの中から応募を募り、その後教師や子どもたちの投票によって決定されました。普段は学内にあるガラス枠の中に保管されていますが、式典などの際には外に出され、掲揚されます。

内容は松本照男氏とヴェスワフ・タイス教授によって2018年に出された「シベリア孤児1919-1922」（国会出版）に基づく
翻訳：坂本龍太朗

在スタラ・ヴェシ

ポーランド・シベリア孤児記念小学校

スタラ・ヴィェシ学園（小学校・保育園）

住所：Stara Wieś ul. Fabryczna 6
05-430　Celestynów
電話：（22）7897046
メール：spstarawies@celestynow.pl
HP：www.sp.zespolszkolnoprzedszkolny.pl

現在スタラ・ヴェシにあるポーランド・シベリア孤児記念小学校ができる前、子どもたちはサムシン、ディジン、そしてツェレスティヌフの各小学校に通っていました。スタラ・ヴェシに学校を創設したのはヤニチ・ブリです。開校日のことを彼女はこう回顧しています。「それは1965年2月の日曜日のことでした。その日は雪が降っており、学校の前には子どもたちがクラス毎に並んでいました。通り側にはグラ・カルバリア市から来た軍のオーケストラが国旗に向かって整列していました。その周りを来賓の方々や参加者が囲んでいます。そうして開校式典が始まりました。オーケストラは国歌を演奏し、保護者委員会の会長は国旗を掲揚しました。私はお客さんたちとやっとここに子どもたちのための学校を作ることができたことを喜びながら話していました。こうしてスタラ・ヴェシに小学校が開校したのです」

1964/65年度
第2学期
スタラ・ヴェシ
小学校開校式典

開校以来53年間で2,000人を超える卒業生を輩出しました。その中には法律家や学者、建築家、技師、医者、聖職者、音楽家、軍人、警察、民主活動家、地方自治体の職員、教師、起業家など様々な分野で活躍している卒業生たちがいます。

2017/18年度には保育園が傘下に入り、スタラ・ヴェシ学園となりました。同年度、小学校には1年生から8年生までで306名の子どもたちが在籍し、46人の園児たちが通っています。2018年11月20日、学校はポーランド・シベリア孤児の名前を冠することになりました。

ポーランド・シベリア孤児の歴史

1919年から23年にかけ、882人のポーランドの子どもたちがシベリアから救い出されました。その中には日本によって救助された765名の子どもたちが含まれています。なぜシベリアにポーランド人がいたのでしょうか。彼らは主に19世紀に流刑となっていた政治犯、戦争難民、シベリア鉄道建設などでシベリア送りになっていた人たちです。1914年から22年にかけ、シベリアには15万から20万人のポーランド人がいたと推計されており、子どもたちの生活環境は劣悪でした。食べる物も住む場所もなく、場所があってもいつロシアに国有化されるか分かりません。中でも孤児達の命は常に危険にさらされていました。

1919年、ウラジオストクにいたポーランド人たちはせめて子供たちだけでも救いたいとポーランド救済委員会を設立しました。会長にはアンナ・ピェルキェヴィチ（1877-1936）が、副会長には医師であったユゼフ・ヤクブキェヴィチ（1892-1953）が就任し、シベリアにいるポーランドの子供たちを帰国させるための資金集めに翻弄しました。しかしインフレにより集めた資金は紙くず同然となり、支援を期待していたシベリア出兵中の米、英、仏も撤兵してしまいます。救済委員会にとって最後の頼りの綱は日本でした。ピェルキェヴィチ会長は日本国外務省と日本赤十字の支援を取り付け、シベリア出兵中の日本陸軍にはシベリア各地にいたポーランドの子供たちを救うよう指令が出されます。その結果、1920年7月に第一次救済として375名の子供たちがウラジオストクから救援に入港、子供たちはその後東京の福田会に滞在し、手厚いもてなしを受けたのです。1921年4月6日には貞明皇后陛下が施設をご訪問なさっています。その後、子供たちはアメリカを経由しポーランドへの帰国を果たしました。

1922年7月、日本は第二次救済事業を実施し、390名の子供たちを救い出しました。敦賀に入港した子供たちはその後大阪に滞在し、手厚い医療支援を受け、服や靴などの支物物資も全国から届けられました。子供たちは1922年7月、神戸港を出航し、上海、香港、シンガポール、コロンボ、スエズ運河の北端ポートサイド（エジプト）、チュニス（チュニジア）、マルセイユ（フランス）、リスボン（ポルトガル）、ロンドンを経由し1922年11月にグダンスクに入港しました。第三次救済ではアンナ・ピェルキェヴィチ会長がロシア領内の通過許可を得、117名の子供たちが陸路での帰国を果たしました。1923年1月21日、チタを出発した子供たちはモスクワを経由し、国境の駅ストルプツィに着いたのです。

帰国後、独立直後からの混乱で、祖国ポーランドは孤児たちを受け入れる余裕を持ち合わせていませんでした。そのため多くの子供たちはポーランド北部にあるヴェイヘローヴォの施設で教育を受けます。子供たちの教育に当たったのは救済委員会副会長のヤクブキェヴィチでした。日本に関する教育やイベントも多く行われました。ヤクブキェヴィチは日本を伝えることで日本への恩を返そうとしたのです。彼は教育の力を信じ、子どもたちの世話をしました。こうして子供たちは社会復帰を果たしていくのです。その後、第二次救済で救われたイェジ・ストゥシャウコフスキが会長（当時18歳）となり孤児たちを中心とした極東青年会が設立されました。青年会はポーランドで「極東のエコー」を出版したり、「日本の夕べ」というイベントの開催、日本の映画上映会などを通して日本の素晴らしさを伝えていきました。戦前の1938年には434人もの会員を抱えていました。青年会の活動によってポーランドの親日度は高まっていき、親日国ポーランドの土台を作った大きな活動となったと言えます。

1919年から1925年にかけてのポーランド
シベリア孤児救済事業ルート

1920年　ウラジオストクから敦賀に向かう船を待つ子ども達

ヴェイヘローヴォ
での日本デー

第二次世界大戦と孤児たちの運命

1939年9月、ナチスのポーランド侵攻によって第二次世界大戦の火蓋が切られるとイェジ・ストゥシャウコフスキは首都防衛戦に参加します。同年年末にはワルシャワで戦争孤児となったりと浮浪していた子供たちを集めた孤児院を運営していました。自身がシベリアで経験したような悲劇を子どもたちにしてほしくないという強い想いがありました。年上の子供たちはドイツ軍に抵抗するための破壊活動などにも従事していました。孤児院にはナチスに抵抗するための武器も隠されており、そのためナチス憲兵が孤児院に押し入ったこともあります。そんなときには協力関係にあった日本国大使館の職員が駆けつけ、孤児院は日本政府の保護下にあると説得し引き取らせました。その後もナチスへの抵抗は続き、ポーランド国軍の傘下として特別蜂起部隊「イェジキ」が誕生することになります。

イェジキとはイェジの子供たちという意味で、戦争孤児たちだけではなく極東青年会のメンバーも多く加わりました。ワルシャワ蜂起の際にはワルシャワの旧市街、そしてカンピノスの森で戦い続け、660名の戦死者を出しました。